

山水图

山水图

山水图

山水图

山水图

山水图

山水图

山水图

御鏡附合小鏡序

衣を鏡に細かきつと異色
 外丈忠境も世ある家母又
 後西紫田時乃変化造次と
 さしとつたかかの百族乃
 以重とい市垣の唐鏡を
 承るに

鏡波根の田井乃重と御
 ありなるも難あはれ御
 俗語す鏡よおひを
 多きもの何れか
 子もあはれ子の後
 老師是を法名
 小冊子なきは

西色部
小柳美と張

安らるの乙未 孟春 雪星觀牛家



能辨附合小加み

目錄

- 一 三物之事 兼多事と色盤の説
- 一 急上中下初中後之事
- 一 附合之儀之事
- 一 同に道之事
- 一 執中之事
- 一 附句よ季を結事
- 一 月花之事
- 一 色字之事

- 一 転正之事
- 一 二句同之事
- 一 併之事 英故事 古款取之事
- 一 互々字之事
- 一 序破急之事
- 一 附句より新古方事
- 一 一處案方事
- 一 急の句教事
- 一 仮名遺事 古人略傳加之

以上



御借附合小加之



雪中菴養々太編

門人牛家著

三 物解

後より前よりと云ふ物といふ
眼より前よりと云ふ二種あり師より
よりて字あり

一 後句脇句二記定轉合の習ありて各詩乃
格式也起と六は時此系物より對して一物
ありて情を起し十七字は結句是後句之

定六卷の教句を梅とせよと云ふは
せよと云ふ物より係る或は場を定むるを
合せ教句よと云ふは係るを補ふと云ふて
清定六の之轉と云ふ教句眼を一連の
お句と云ふ一天地より人乃生るる万物
始るるより一紀を定むる附を
微細よと云ふ二句乃懐ゆるや不遠を云ふ
と云ふ句目ハ合の場を云ふ百負お仙乃
續とのあまを詩乃格と遠く定むるあり

詩乃起定轉とハ

薄暮層巒雲遠腰 傾盆一雨定明朝

老翁八十眉如雪 立接溪邊獨木橋

世句のんを夕暮るるに云ふは山々の
細を云ふ乃めくは凡情ありと云ふは
かきかへる程乃毎るの期程を云ふなり是
後句と云ふ乃一情之才六世山乃日和を
又云ふは八十の翁ありかくの如く教句
眼の情を轉るる系情二句は云ふ人よ

一轉也俗也於古人乃之物より更まて

春

^春 春 ^春 春 ^春 春

薬 薬 薬

吹 吹 吹

鴨 鴨 鴨

^梅 梅 ^{雛子} 雛子 ^{雛子} 雛子

梅香の川と日乃出界山路

不く年雛子の鳴る川

おのちを春に透りて

^春 春 ^春 春 ^春 春

春年朝日さきあり

礼 礼 礼

教への古産似合ふ

復

秋の
顔より
水鏡
雨

そよめ乃花咲みりり麦は縁

豆のふ熟乃ちりり溝川

上流を通さぬはりのふりて

秋の月
涼
時節

市井と相共自ひやち川の月

暑しくくと門く乃声

二重村よりも果より穂はきく

秋

秋の
穂
芳

穂の穂をかきり 西日う那

穂落りちか穂の穂はく

芳の外乃穂を満ち松こそと

秋夜
居不

灰汁桶の糸やまらりまらり

池のすりきり音も採りて秋

新雪交りしころ月影

後白 初雪 板 岩川 舟二 磐地

初雪やまじ日影をぬ秋乃語

舟二 交りし年 濁る岩川

世ふらう居村の磐地さまりて

後白 初時雨 舟 木の葉 舟二 猿人

雪の初をわいほくらひぬ初時雨

ひらき風の末葉を川さる

段川の胡々満る川越事

後白 葉 舟 橋 舟二 糸巻

ちあま介はやわ斗の星乃あ

糸巻をよこゆる曉の橋

いと番手流の舟を渡る松舟りて

舟のたこ盆の説

一 日向月より揚句をよこ物と違ふ附句千後

万代也地際皮肉骨の智ありお向と身は
竹の介して眼は又さし一々然時を敵おしひき
附及支との赤城ありさ物あぢく色
おのひるまを又さすの遠也たさし

先志の月を煙草を食をく

一のまぐさの赤い糸をの小袖上る履

さねたはあまたこもるさし井は魚とりつた
身みやみしそ用はかゝる時を常き
あつて拍廊乃初會かゝる又いし也

如の鷹をよ小は糸もさしおのいし
出さる風情をんは

又

ひまさらやとち洞多とこ盆

使者さし小坊さし掃かす

河系侯の使者は洞乃掃除の上あすし

限のかさ具の提多とこ盆

尾君は浅黄綸子は丸既巾

小く

清い庭わらう花尾さつ手源切花やう花
もの提さるたささるの風情なり

浪打志めはたさる新道
細無き将基不向ふ事合羽
豆一志さうの居候よゆさるれ
又せ先なり

^{ホコリ} 咲くあはれ花たさるん

暮くさる何階ささる吹くさけ
會はもの埃ささる暮くはと
さるははあさる

不さうたさけの塗もささる
麦秋のささる由事此何けさ
同く埃ささるささる塗たささるん
あさハ風波かさうて固合ささるの麦杖
さもあさささるれささるささる

中野も只一色かゝる月と人桑の心
くまらうき附句もそれなすし

急上申下

一 急をきくとちく強となり只一情かゝる和お
おもむき色あそぬ急をきくあいらふ色を
越さぬくなり解語の附句とて申
下初中後あそみもあし

上品

東のまきやうきくゆふの歌

くまらう後北積願あそみ

上品の人待あふ夕化粧あり我せこ
あそみもあそみくま北巻のあそみ
くまらうきももくと右を乃君あそみ
さあやう夕巻の者の見詰あそみ

申下

比ハ岩口北柳枯く

嘘かりのあそみもあそみ

川竹の風情ありはみのあそみ

あひの女癖多しよ叫ぶる平流此を根
あし人柄乃らちよ味よきて申下の意と
いとんを

下取

田植中一色の白き雇人

右見よるあさきと意と焚きと

君いさるさよき麻糸思ひ合さるる
とくくと麦搗唄の節あり意なきを衣
かうーやと見女の雇人又るん飛せりか

るよ如ぬ只内て意さるるとりし附白もけ
阿しりを

初意

押やとてもそめ初意

雲下の掬取も此意をさるる

さく月夜の初すけかうと意さるあく免
あし阿どかき意あり申さる初る女も
さくあしとて雲下のかきあしとて附
んや

父母愛子女

女是聰明子

生不識死為譽

繡出此譽是

是亦此余信也

申息

習く控ふる事候に信あり

古事とてちの世は梳也

まのふの信は此の仇あり。すうりよの袖乃
実あらんお世とてあはれと合て申の
急ともいそん

後息

枕のぬを解きかくさむ

髪結く幽天をうらみし

揚中、肥之のく唐帝のおひ事主人
去て漢を法をうけとありし。五月のつとく
あつたこの及魂の事もあま母しき
於此此母情世六種よそし
よひてまゝ信集のちまゝと扱せ奉る
是を讀そよまき

附 根くよぶくうくう 俗を引

附 浮世は果き 皆小町なり

附 馬 千 歩ぬ 日と月と 色も

附 茶をこころ 茶屋中の秋

附 世をく 先う 合兵を待とう

附 水もく 色もく 被の辺 陵類

附 眼 後く 色もく

附 我 おおひ 浮世一人

附 け 色をい ちん すと 水え 吃あ

附 下 色もく 色もく 色もく

附 我 年あり 色もく

附 色もく 色もく 色もく

附 長 色もく 色もく 色もく

附 口 色もく 色もく 色もく

附 唾 色もく 色もく 色もく

附 色もく 色もく 色もく

附 色もく 色もく 色もく

^{ある} 形城のものをいふありらひ
^附 抱瘞神のりふの髪梳きの好
^{ある} 志とやふ朽葉不麻子の古瓶
^附 射もそのまゝ 師出のまゝ

附合三儀

- 一 室可合 あるは對して慈向と云ふ事
- 一 句作 あるは對して新古と虚実の事
- 一 ことえ あるは對して枝おれ事

附合四道

- 一 轉 あるの人情我々を備へて附の一轉あり
叙の附句をいふ事あり
- 一 随 あるの海情をいふ事あり
- 一 放 あるは對して風鳥をいふ事あり
傷をいふ事あり
- 一 送 あるは海情をいふ事あり
附句をいふ事あり

執申し法

- 一 芭蕉佳句の如き又條の如し附句は執申 之後の
室可合の

法ありて執申とハ中ととるとりよたり
案方の肝要とき源氏物語がその大筋
あるものも次への右近より筆をよこして
お後ハ校系ありとを降る所のみ紙端に
先云後ぬのありしとき正と能くして
初後ハ寄とのあり附句もたのこく
お句よ對して附句もその一字二字
三字あるんをを毎されハ句お向く
新向と求るより違へて及みして執申の

法を用居し一字二字にてあをを
加へたもしちぬもしこ二句連綿ある
ところの附句と違の差を切をわたり
申お糸を引くところ情のわよひを
よぶとを法に採るものも無んや

原一お校此かき肉桂

おとる及て後かくなるもの枕

附き及此一字

鞠強き積り秋を打う

秋の白髪をとく足付く

附く老の一字

手紙を携へ人の名を問

本懐を知せとをのくかひする

附く振る

け秋も門の板橋あがり

教免くゆめをく掲ぐる月

附く右近

鳴子おとろく斤教の意

盗人よつきてお妹の身を泣く

附 盗人の妻

附句お事をむまふる

一 附句の春移り秋くつうよきて初人の人先

手あまより案をよよいとお句乃全神は

附は季にお句の志をうりく附を例乃

執中なり又又三句おひくはるるは

時を季あまはあまをくあまをく時を

季よ一他より一とせ先師とあま此

ふの化し

鬼姑やう形をう人泣せる

焼版のそびもさうあく六何孫陀

世不歩越は人事あり群文並於のたつ
あはささしくと糸原と例の境乃
若草或と陽中やのこのやう師の目
かゝるやまき季之のこのあらし多れ
糸物は一化あふとあり布服を因く
おふれあふとさつとそそ花もすう

二月下旬眼のあらし物丁地あれと

秋を隣は麦あらし

師の云をうとく季之のあらし遠を授
さしーそ足し玉あらしを思ふと
あり粒季乃あらしあらしをなは
捨ふそを續てふまき

あふ
あふとのあらし

おと別りはうと思のあらし

あらし思ふとあらし

小かこ

日 膚くささき秋風

新しん鯉ありーくさきおき

附き川はくさきおきありひん

日 宮川よきさるやある丹の乾

編きありともきひん利刀

附き一利利の編きありひん

日 下も此のあけなきなり

利拾とせむぐ尾は九十九髪

附き老きあり尾はありひん

十五

日 下も此のあけなきなり

は後対平河くさきおき

附き後対平河くさきありひん

日 稲の茶屋もあきさき乃日

くさきおきありさきおき

附きおきありさきありひん

日 蛇の尻尾もあきさき

縋を解く後唐のをき

附き後唐のをきありひん

十五

日
あつたふも 少くはなるに何事

土をすくひては 其の風のきこはるる

附くは 土をすくひては 其の風のきこはるる

月夜の事

一 月夜の句を一卷に 此は 法陽ありなくて
あつた道程を 知るあつたの 債ある句
なりとも 知る一巻を 潤下と 廿五條は
あつたそれとも 知るあつたの 債ある句
事のとあつたら びては 附ぬ句 ありき又

附句は 季を 結らとく 月夜を 句の 用は
あつた 働は 一巻に 或人の 句なり

あつたは 己の 心を 赤子に 結む

あつたは 花の 派生も 附は 月

新附句は 一巻の 句の 派生も 附は 月

月と 心と 句の 用は 赤子の 心なり

あつたは 附の 句の 用は 余情を 結む

附句は 一巻の 句の 用は 余情を 結む

附句は 荒ても 花は 此部 あり

附を回致あり花は句作の用之花は
如く加ふ傍若無人の句を出せり
乙児は只何ぞなく附を〜して席上
舌を吐く

醫者うをくして百はありぬ

菅の多平は此部とせて

是もその如く別あり附を句は
とや〜とらん〜と花の一字を
句作也尾城の巴靜々席上の人
は涙を

こゝろ〜附句なり

枕も〜川管巻も〜

浮舟をまらす花の浪月此浪
流舟と急の河〜ひ〜と
道遠也月と花とハ句作あり

叔曰此頃字なり我新

月を不〜は月貝の酒

附を山依此何れ〜月は句作あり
か人少人あぬ七外此照

名月此の年阿つせふ此芋島

兼句七外の照とあきとまきまの句なり

よのこし附き芋島よこし月と白蛇之

暖其の百合又深うけけ

根の青しこ明号芋此月

附と妻人月とあしらひあり

まじくと銚原しるすの上

酒と乞食此板やまき月

附と乞食月とあしらひあり

甲と赤し出る二月朔日

初花よ伊勢此艶のとれ初と

附と伊勢の海州と志とあしらひあり

曲突焚付る妻此尾燈

花のそ路月此鏡もそれあり

附と指角之月と初と月夜結しと

立働く姿あけくあり又月と此句と

前句此後者又切者不切者又切者の人

兼句一是附ハ初よありしらひあり

附句み骨をくせぬ之三吟未事記初打乃
そはあ秋の三句めちるを店乃難を
まゝてふ小男麻と着の附られうりさき
女麻も毒を枯りも何くすちあ良
あゝるの麻す一三句まあ一三雑也
よひて秋まなを附るむ川一とと
ちくまゝくくとまゝひ侍り名人のん
つくひ好字の化者あり一

色字事

一 二十五六條目曰及句附句もよ語句の深ハ
さゆ時ハ服を用く袖中ハ画をまき一
と也画をまき黙りまは人事のよまことく
形あつらふは侍中の画画中乃侍も
いふあり一

顔むさしをまきおこりお出り一と

おまふちり一白川の雲

まゝり一まげらるる月の影

ちりまゝり一梅の影

初の赤きまを紅乃色字のまを杖をまゝ
ほ乃條ま白の一字まをまを合あり歌を
詩も遺却珊瑚鞭白馬驕不行と
が年仍の綾帯を飾るひ言乃侍も
白駒紅葉此色字ますくまうとう也
ままを貴妃小所といやも衣袂ありま
心をくこすなうひまを又七又
七人の風姿も彩色ありまを我のまを
人乃耳まをひ

白字

後白くとまをまをひ

初まを上と獨此居人まをまをひ

紅字

紅字赤くとまをまをひ

かくてハ上と獨もまをまをひ
まをひまをひまをひ
まをひ

まをひ

河登り青江をくぐりかへり

下戸にも物持にもまの字母海ありて
しり母丹まをまひけり時をば後志の
海江の風物より海を照あり天地は
厚くこの何れも色を移り事ありん
後句は色字を以て風姿定まり句あり

新正し事

志だり何けり魚屋の主人

母の服もろぬ去珠を泣かう

一 志は波はまを師もあも新海之侍を
忽貧者の孝公もむりねて染もいとまは
らくかのもけき武士の心も移る海を
かろる人なり是れを轉りて正し事
志むる不孝不忠不義の句をば
身一なり情も移り句ハむりし事
いひしりし情もと骨牌をかきし
新海のあきのとを文巻のすしり
是俗後年活をたぐもしり新海乃

一 益なり

二 旬月し事

一 附合の之句めを粉骨まなすを云ふ蕉門の
他者おほくハニク物之の結乃とく人情二句
傳ふてや之句めと冬の夏は夏の香乃と
逸々一巻力かき一右集の骨折を師よ
學ふてはの云ふさこ集再

みよはよのちうはくなみ

あはよのちうはくなみ

熊野入るる記と後ゆひり

きりりり紀の関ちうかきかみ

酒く元とて意あかん

双六の目をものそくとそと

邦人車續傳と加例と赤紙の何法
新一記を貞徳姑袖日記と逆茂本と
いふ心ハ先本と作者の一己のよ拙せん
逆茂本を川のけく記よりけく兵を
城攻め近侍るうとく名人の交る一巻を

小の

二時三

那の工く自他分ぬ所〜とていひしは〜
此六句乃解をい〜先みと後との力
よくあは〜と云句も自也を人の意を
君と解も日と〜とあるの及もあ
上層と階と他あり是を花の上と
かとの清浄と云〜然也人〜と注
あひら〜と又他あり園と〜と注
酒で元〜と〜と舞者〜と也双六の句ハ
一とたの大樽は階ち〜と〜とを場

そのか〜人は是の形骨なり〜とのま〜ひ
是等を述句〜とてよま〜と〜

借の句は故事古歌の事

草履の志を〜とてハ歩破り

今下〜と〜と撰集は沙汰

一 翁曰侍の句は〜とてあはは能因乃
境界と云〜階とあり東西の能因と
階〜ハ〜と〜と人〜と〜と侍〜と〜と
又人を定てりよの〜と〜とあり

後心のまゝめめ誠分於麻山

内義政の少く呼声と誰

いふは誰ぞう侍あらん又或序めて宗祇
老人悲莫悲分生別離樂莫樂分
新相知けんをさうりき

結此心を何よたしくむ

あひひとせむと別をむさむか 宗祇
かたうりのうゝま事とさうりし
つり色しるましく 故事古ふらふ

それとまゝめやうかきませくつりし

まゝ字く事

燕の柵あゝまをさうめそ

まをたはるる花の縁をさうめそ

一 花の居る花乃残花はかりし本を割
又乃るをさうめそ 花古ふ取めし同物
異神の習あり師よりし習ふ

序破とく事

一 去来曰表の句序の序之の打破名は

折急なり初折二の折位三の折まき
乱きて多折の折まきさしくし折
是百負の法今付乃三首能初折
けやけまきしつひ多折の折まきあり
くすく位ある事と云出く判をまよ
長短の点を引漢一有元首を引
とや英りん

附句は新古をき事

一 支考曰附句ま句よ新古を折場

新古あり

養云東渡羅家歌いそ古うんいそ
新うん江戸代集了蓮之

毎句と定し其く折る按手取

三句ありかく折る折る人

一 折る紫方事

一 其角云一卷五折句九句十句ありとも
一二句能句ありそし折ら能句を
せんとも六却て折る事あるものなり

いさよふまじふかゝんらに随ふも記句を
おのゝく

色の句教之事

一 芭蕉翁の「宋祇宗の句」を色乃句教之次時亮
勅之後二句の「宋祇宗の句」とある是れ或乃
法之背を色句一句を置ておる此は色乃
色を志うげらとあると換得せり又
み十負百負とらへも色乃句は
一巻とていふも物とて

仮名まじり事

一 語のいせ下み出訓

あゝのいせをまこそけわらげま
こ羅たい朝ま類ら貝ひ薩ひ灰

一 回下み出声

いさよふまじふかゝんらに随ふも記句を
あ由い細く倒さ次い牙く次ま次ら牙

一 語ををり清く分るる

おもむく趣おもむきおも面白く

一 うの字をむは漬うかのひ

うの仮名よむの字をかひて入

むま馬む馬羽玉む梅め埋木のむ埋木め埋木

一 下よ書うの字のひ

入声のふふ也
同かハ不あり

字の音のう乃字ハは乃すむるあり

あり奉公あり女房あり料紙あり焼香

一 うの仮名よふの字をさう

うのうかよふの字をうへハ入声字

あり祝義あり蠟燭あり法あり五節竹

一 申のえの仮名 江へ正字衣へ

申のえを申よゆと申く時まかく

あり剛也ありええあり肥也あり越え

一 奥のえよ書事

おくのえをよ書事ハあまのさか

あり声あり家あり未あり杖あり右衛門あり左衛門

一 申のおの事

申のおもむきさくか記仮名そし

を云井 くわねくまおねまきおあしえ

一 其字は括るる仮名は事

そかりりてみきふ外終のう方もあり

く位わねまわめてとあおの事

省直 猪

右の外

きくいひよりよふ仮名

明闇軽重安

ヤスキ
ヤスク
ヤスイ
ヤスエ
ヤスラ

かあひみよりよひもたしそおま

あしおまま後まけりあしおま

おりあしあしおまいしおまあしおま

歌仙

心つし田やまきくと深て神し色 蓼太
 山と夕日すし秋葉ちる白以 牛家
 新供奉と牛馬の碎ぬさうさく
 燧袋とと垂わきれつ 太
 月々き猿乃やうと此一森是
 漱のうかり家秋乃川言 家

り

多秋えとさ落とるれ一風の跡 太
 下書とこのやう同安まらく 家
 蹇の輝とさうや、顔あう 太
 治者よ惚く程哀なり 家
 筆と只白雲のゆき片便 太
 甘加子四ッ五ッ後よそまき 家
 富つきる下都すしと此集跡 太
 江戸よ随ふ江戸の送留 家

漸老一確踏く明か
すのまゝに
花衣脱く増賀乃あゝ裸
乞食の泪かふあゝ
酒癖乃世とまぬくよ
城あゝやくふ囑箋の札
都くく子色意乃雲心
帯くくくとま傳て解く

太家 太家 太家 太家 太家 太家 太家

青梅の色まよ迹る刻ま
厥菌匂ふ麦乃夕晴
曉時と車二轆の色く
まゆりまあまを脊中合
お傘を別くま分袖ま
やよま夏腐のま水る
桃もみ行終何乃く
法若揃ふ揃弓の終

太家 太家 太家 太家 太家 太家 太家

利捨く交離角力此世加怙 太
 むら腹くら此法心と出て新 家
 常麦切の晴文、著と志どらなり 太
 ろん婦人きふ漸乃枝后 家
 花海のる神ましくて吉野山 家
 望くら嬌く妻の何事月の 概筆

去る冬此終ひとて夜の玄捨を
 寝よむらひ侍る

瓢中四季混雜

加んきと時と如點の下紅葉 天府
 折まくと折れく花乃何事此 蓼太
 詢。夜ハ人きも告す 妻の居 魚汶
 常や 俊成今此 小築垣 乳峰
 似乃多又月の室中や此月雨 百頁
 冬月をさすふふ此橋此 松隣
 冬此や深流さ此を狂老一 懐車
 きの子あり河い多又えり 杜若 富屋

河ヶ原のくまき 権や 郭之 如風
 出代や 鶯よ 九年の一投 籠 鳳名
 葦の市 丹 隠れを 咲よりり 葉室
 藤よ 人乃 姿 短し ま 和星
 涅槃舎や ひと 是 進 手 秋 白鳳
 加ゆ 杖や 梅 花 牛家
 ひよ け 笠乃 子 確 普成
 糸さうり 木の間 松を 子交
 田よ 碓 氷と 萩 角求

吹て け 妻 幽 なり 五乃 留 跡 我
 菜の 花や 舟うう 阿 村 権 逸 賀
 灌 佛や 木く の 帝と 沙 花 口
 魚の 知 せ る 所と 梅 南 此
 鏡より 人 畫 境
 松の 版 白 苔の花 入 左
 臥 妻 也 志 暮 山 車
 志く 易 也 志 暮 山 車

荒海の更と暮らや夜乃雪 連丈
 花や去秋去るぬんよ紫 蓼太
 白菊此色は世を惜るる 小泉
 去るきくや白きを深る秋も那 文母
 葦陣や新さく元此を去るは 友路
 下戸にすは花の嵐と詠きし 白翅
 夜鳥居て系継く世を去る 夜兔

山の鳥はゆきまとなりぬ 枯柳 夜梧
 花吹雪は去るまを思ひし 吐石
 世は去るまを思ひし 曹の系 長好
 男は去るまを思ひし 裕柳 鳳足
 蚊は去るまを思ひし 秋乃風 蒙徑
 去るまを思ひし 地を踏ん乃をのま 梵新
 去るまを思ひし 相手を去るまを思ひし 千牛
 去るまを思ひし 青く去るまを思ひし 牛家
 去るまを思ひし 雪を去るまを思ひし 雪凍

小町

雪

菜の花も辛子に迫き名残也 貞雨
 喰ふて甘し旬一 露の芽を 蓼人
 活ある人の世もまじや夏の月 始喬
 松魚飯乃漬くや江戸乃星月夜 埋牛
 日をいふまきさくく 白重 牛家
 念月や暎りけとわしち 仙凡
 約奉の都一かき月夜也 松把
 稲妻は細敷くく敷甘く柳 三思
 散花や赤ちり多き盤のく 斑象

枝折て蝶蝶のこゝろを握り 周竹

白菊や良句の果を九十九髪 杉風
 菜の花は黄たき花を海唇 青雨
 夕鳥や揚鞠舞多 志子凡 文来
 及乃阿多系何く世 百合の花 梅郎
 村あつ月あつ千く花麻黄也 蓼太
 葦は然地り垣根を荒よりり 蓼房
 去しくと定家くく 能毎くれ 倉胤

三十五
 三十五

月出さす姑いさく 筑人墓糸 雪磨
 木の葉より別れさく 出る方ひさき哉 季令
 さくさく 玉色 均さくさく 乙鳥く神 流光
 川之と 散るをさくさく 乃花火く方 牛家
 ゆふの 心のせそ 又方扇くれ 時中
 家や 踏踏 踏踏 我くと 夕暮くと 竟平
 采人 やさく やく 毎乃 下あくみ 子得
 岸 靴さく 一蹴く 子 老の 坂 采文
 とくく を 只ひと 口乃 牡丹哉 李院

舟ち 産此 馬 勃 将 負ふて 多き方 英波
 舟 門を 形をくう なりき 中しく 車童
 岸く 門の 儘まを 白文 着る 柳 魚越
 草 妻の 形と ころく 下 河く 美人 梅素
 決 施は 押今 けや 鷹 木く 丑明
 む 欠り 番や 門は へむ 琵琶 法師 蒙甫
 子 子 振 夜の 海や 神 糸 舞 牛家
 一面よ 子 拭 白き 十 並く 礼 石意
 極よ 組一 岸も 連理の 契り 方 岡牛

神との百味揃ふも又糸
 帯して青田を如分堂の柳
 妻もあや鶴乃啼尾の下糸
 まきしりしつれ彼春此清乃声
 け君とりし丁我思一まきききき
 十六花此君也葛城乃神越ひ
 月涼し清不夕日ハ玉れくく
 筆や鉈子追ふく兒ひとく
 濡色よあや免る花の雨夜也
 牛家 如水 稻里 彭壽 連風 曲川 豊前 竹條 磯川

隣きうぬ舟よあや尾の夢
 昔のあや波系舟の新酒れ
 旅乃口の外よ三日四日様う那
 鶴の橋鶴るる此月夜う分
 分別を基よせえあうり冬は鶴
 胡音も垣るえをきり女郎は
 ちのつらうを清抄の園乃菊
 流きてをあうりまき挿れ
 冬の日やうを何して日は居
 梅堂 尺堂 莖路 寸々 高成 立冬 連牛 故友 廿三

ひよこのはなと月とそと千松鳴 牛家
岩、空電やしも海まで峰の松 吐月

菜の花や裏表あき小都くち 綿衣

丘の月をよみくぬ謀く柳 深松

姨ひとと春を捨りう反北月 五蘆

盃乃月又舟くきき 衛久礼 鬼秀

荻はと折く黒くう 桃の花 鬼守

鴨く山やまの深のそき門回より 風馬

急風よ吹きあけや更衣 鯉平

サ深の志よは心くもや捨小舟 玉芥

常や何く啼ても鄙あくは 鳴翠

梅香や詩人の牛の尾のちき 大斗

白唄や里を月結る乃はと 車時雨

川てみり我玉の結よ鳴子縄 祇卜

家神をちきぬてあふ秋の雪 意長

舟く女守啼や春も振向人 斑石

陳やまき葛あふ人土用子 嵐大

ことばと中上掃火を秋の香 吏中
 年よぬ月むらあり枯尾を 尚負
 顔を見せや誰よ遠き法鏡の声 蓼太
 笠人乃其厚き雪なり子歎 采光
 山吹や志新くゆふさし布 牛家
 海苔の香や魚と水よの心より 斗水
 うらみおほき青蓮といへし月梅 汀雨
 さやや 芍薬と 柀 及 青き色 百鏡
 山門や 般系 三つがすくく 羅光

此書よ京と扇のきぬる也 宜麦
 空むらと志新くは梅乃白ひし種 子眞
 うらみおほき女は似 安き月入るな 涼花
 花をさく物喰ふ花の折枝に 風道
 あらぬ乃ち照あむもくち代 牛家
 写るものと移しきこころ 因州くさ 乳昔
 志く菊よわあは隣り 荻葉北 麻佛
 山の乃西松をあらえて也 嶽月 南冠
 系乃雪其の園分て 照射く水 山幸

秋風や一筋きぬ。楳乃糸 虚舟

玉翁山中

雲子一約六月とある。秋と 月泉

他卿

牡丹散るしちかきなりぬ二三片 洛陽 葦村

曉乃香田 晴くく 湘の秋 八董

象店の天定教も 飄く柳 尼 蝶夢

再手やくふりおめてて申す田極也 浪 緒九 旧 圃

思ひ何もうと 猶もあちやる 毎たれ

凡そ実女なりル 紫衣良くちる 采汁

こころをさへんとく 志ぬ 柳舟 播州 石漱

遠極 梨あまき 了を 嘆よりり 伊勢 布舟

烟うちや 初音を せり 加う 入楚

岸取 又 然も 世々 一ちつ 多貴 帰白

傘 ゆき 音 吹や 甚と 踏去り 素因

む ぬり 香よ おとろく 梅の 散日 式 伊賀 標良

毒り 香や 縁を 拘下 比丘 尼寺 尾張 相雨 也 有

尾張 伊賀 播州 伊勢

空の會や始る火より虫
 赤連の河本を揺る春日也
 後河とよ月と知る麦の秋
 きささ起や川も桂乃花星
 物おのふ鳥はけふや秋の風
 山吹や苔の時を突乃こは
 下等や足乃下行ふあ忠吉
 入おを竹て居る花の下
 突ともちく葉もななくはくは

蝶野
曉春
祇州
杏麻
蝶碎
推
葉里
外府
官棠

香中、居る

花咲く香の中な家居る
 豆海ふ及て焚かれ麻の声
 川多此白きを居の月尺れ
 虫の音よんと無す降夜式
 ひとふ敵乃猫も啼おまをさ
 小妻まてあうえうとや
 接梅いふの鳥居や苔の石
 袖の香乃下戸といふえぬ志袖也

去傍
李子童
紀州
湖堂
八丈島
風魚
千代尼
羊化
會津
仙臺
巨石
撥司
緑水

柴舟の脊は輝ひよの時はあり
ふよ日を添えわが之を百日紅
心とくふとまは控らまぬ曆か那
跡先をぬきえとる乃涅槃衣
夜顔を飯名は散り牡丹式
行秋や藜と杖まるとくう
夕立やまうく晴る人乃声
入木のそくぬうよまま雀かな
ゆふ顔や意流る月もふ乃教
古道 遠に 稻牛 南都 控 圃 常法 投茶 柙苔 青牛 麻石 松林 扇鈴

亦くまきま晴る田植うね
そくも霧ふくは風を面句
十六あやせまらぬ峰の松
杯よ百匹くかむ花袖舞
葉様も織のまをさ流りり
初原や喜信山の片よも縁
回子北浦よあまきく人まで照射哉
うこまをそあ流りり冬共月
控舟よ躍る魚何りまのあ
上総 更仙 谷戸 可徳 下総 磯江 巴蓼 巴水 碓泊 武 歸景 葛叟

新まきやまゝ 此乃年出れ 西洋
 橋ありやなりや 然も鳴蛙 石發
 資胡の夕をひくま 柙の神 遠口
 口上乃無系より分 粽うな 後河 耳得
 隈かくて月さく又えぬとを月が 奇峰
 物さ中よみきりきり月の 洛梅
 芥子のさりあを五日あき 散々 兀子
 星舎や地さあろそ 又大井川 阿人
 かまろ子の蛙を色一 仏生會 令免

此小冊子の深おまのやめおん人さ
 ちよゆりなるとりて 孫と世り
 ちかりの園いあまを 守山れ度ま子
 ちかかむむはくらのゆりて ち様とと
 ちかかむむはくらのゆりて ち様とと

中巻終了

安永四乙未歲

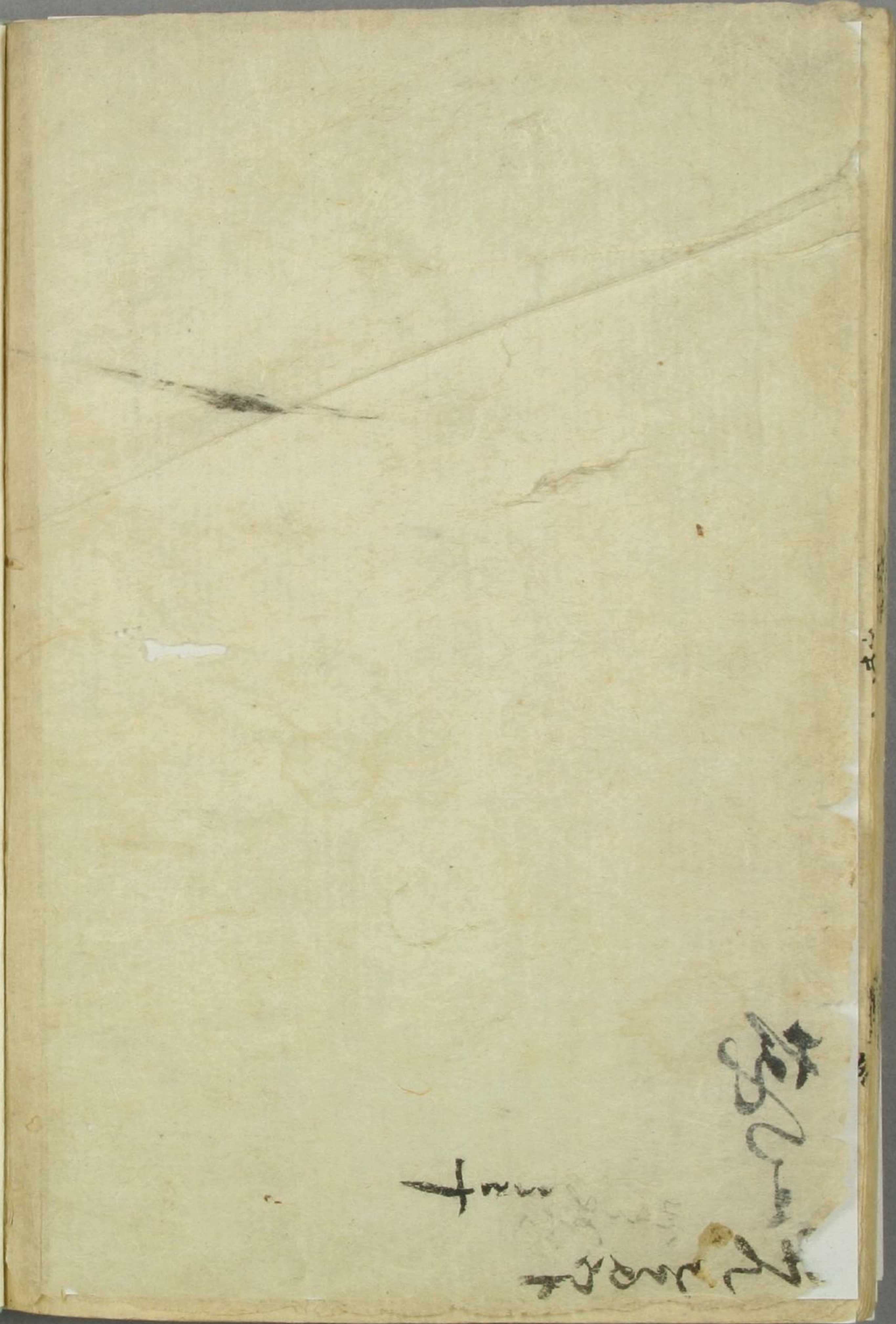
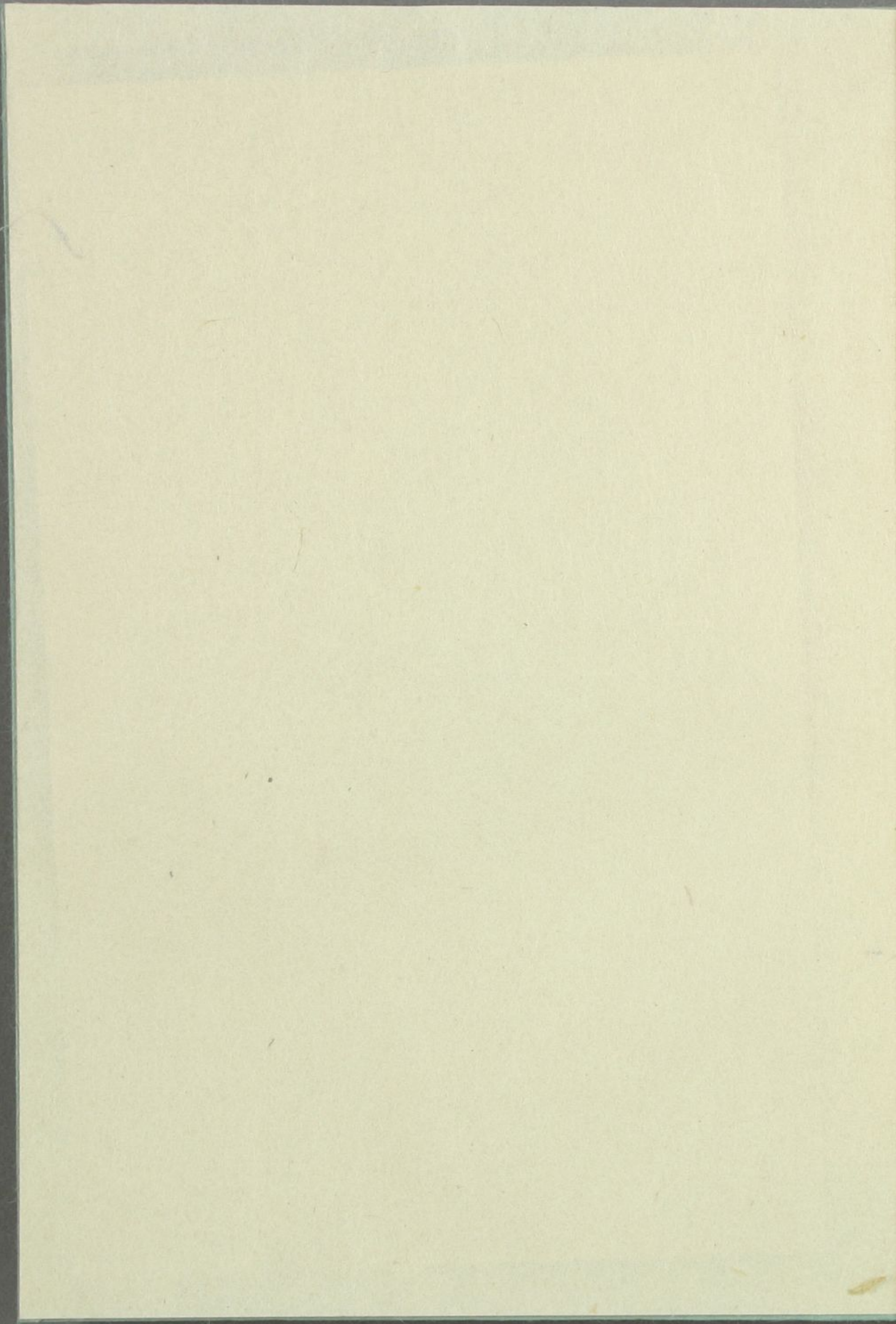
江戸本町三丁目

書林西村源六



柳

西村源六



man

1850
1850

